

# 学校現場、教育委員会、大学院生という立場から見えて

## きたもの

### その2 「研究とは人とのつながりの中で行うものである」

#### 1. 研究から遠ざかる自分

大学院生のころは、新潟大学の松井賢二先生が研究を常にサポートしてくださいました。学校現場に戻ってから、5年間は実践するフィールドがありました。実践研究したことを学会で発表したり、また上越教育大学の山田智之先生、大阪市立都島工業高等学校の松下眞治先生と3年連続でシンポジウムを開いたりしました。研究の楽しさも感じるできるようになりました。

しかし、主幹教諭や教頭という立場になり、学校のマネジメントに関する仕事为中心となり、次第に実践研究から遠ざかりました。実践研究から遠ざかることによりキャリア教育学会からも足が遠のいてしまいました。追い打ちをかけるかのように教育委員会に勤務することになり、実践フィールドからは更に遠くなりました。しかもキャリア教育の担当でもなかったため、キャリア教育との距離がより一層遠くなってしまいました。研究への意欲がしぼんでいく自分を感じざるを得ませんでした。

#### 2. 再び研究の世界へ

2017年、上越教育大学で行われた第39回研究大会で山田智之先生から実行委員に誘っていただきました。発表できる実践研究はありませんでしたが、久しぶりに学会に参加しました。教育研究懇談会やその後の二次会では学会員の皆様と楽しくお話しすることができました。この学会に自分の居場所があることを再認識しました。「またキャリア教育の実践研究をしたい、この学会で学びたい」という思いをもつことができました。このことは翌年(2018年度)の大学院博士課程への入学を後押しするものとなりました。2018年山田智之先生から再び声をかけていただき、シンポジウムで久しぶりに発表することができました。

しかし、教育委員会の勤務と博士課程での研究との両立は難しく、授業で最低限の単位をとるので、精一杯でした。そして、2019年度は休学することとし

ました。研究意欲は前の年に比べ正直下がっていましたが、同じ市にキャリア教育を学校経営の柱とし、実践研究をされている長岡市立関原中学校長（前三条市立大島中学校長）の田中哲也先生との交流で自分も研究したいという意欲を維持することができました。

### 3. 研究とは人とのつながりの中で行うものである

これまでの自分とキャリア教育の実践研究や学会での活動を振り返ると人とのつながりの中で、それらを行うことができたと改めて実感しています。若手研究者の方はもしかすると研究というと一人で黙々とやるもの、孤独な作業をひたむきに行うものというイメージをお持ちかもしれません。研究とは「自分の師や仲間から学ぶこと、仲間から刺激を受けて研究意欲を維持すること、師や仲間との議論の中で自ら気づくこと等、人とのつながりの中で研究は進んでいくもの」と言ってもよいと私は思っています。

### 4. いよいよ研究スタート

今年度、新潟大学教職大学院の実務家教員として、赴任することができました。運良く研究をするには絶好の環境をいただきました。「研究はできません」といういいわけはもうできなくなりました。修士課程在籍中よりご指導をいただいている松井賢二先生の指導を受けながら現在研究計画を作成中です。お世話になった教育委員会との連携も視野入れて研究を進めて行きたいとも考えております。

指導してくださる方、ともに研究する仲間、協力していただける方との関わりと大切に、また感謝の気持ちを忘れずにこれから研究をスタートさせたいと思っています。

(新潟大学 田村和弘)